

Y 3229444001010211 定价：每份零售每份0.80元(含邮费) 邮发代号：371223(国内) 371223(国外)

春燈

2017 June

6月号



主宰の句

安立公彦

初花を待つ朝あさや総住まひ

裏窓に鶯聞くや民家園

黄昏の空独り占む桜かな

鳥雲に入るや日暮はひと恋し

ひと筋のリラ咲く道や愷作忌



安住敦の句

憂きときは男も髪を洗ふべし

『柿の木坂雑唱以後』昭和五十五年

古武士のような敦先生が、女性の独壇場の季語で作句なされたのは意外。七十二歳の作品です。

折しも俳人協会の公務、執筆活動と、八面六臂のご活躍中でした。一方、右眼黄斑部裂孔の診断もお受けで、ストレスを少しでも濯ぎたくていらしたのでしょう。

「髪を洗つて」、すっきりとなされた敦先生の茶目つ気たつぷりな笑顔が活んできます。

平野 加代子



安住敦の句

雛流し松籟これを悼みけり

『午前午後』昭和四十三年

私は人形作りが大好きです。でも転居のため今年は雛人形は雛の日には間に合いませんでした。そして今、原稿依頼を受け、思い出したのは安住先生の句でした。

私も流し雛を句にした事があります。今改めて先生の雛流しの句に接し、あの優しい面差しの雛が冷たい川底に沈む様を「松籟これを悼みけり」と詠まれた先生の豊かな感性、そして哀切の情にほろりとしました。

井上正子

燈下集



○ 矢口笑子

雪解川歎喜の音をたつるかに
このあたり昔川筋彼岸道
猫の妻閻魔の前を憚らず
新宿の風素つ気無く鳥雲に
大木戸門大きく開き風光る

○ 都丸美陽子

まんさくの村を見下ろす火の見かな
種芋や灰をまぶして明日を待つ
夕桜雨の名残の雫かな
寝たらぬと退職の夫山笑ふ
口動かさず手を動かせと新茶摘む(亡き祖母を想ひ)

○ 松山三千江

小流れや川藻の揺らぎ春兆す
公園の池さばさばと鳥帰る
永き日や床屋にたつぷり蒸しタオル
道路工事の迂回看板日永かな
古雛を店ごと飾り町起し

○ 鈴木撫足

遠く近く木の名確かめ青き踏む
カンバスと戦ふ太郎春疾風(岡本太郎美術展)
さきがけて馬屋に春日のとどきけり
鉄輪錆ぶ船頭小屋や藪椿
東風荒るる甲州民家の軒深し

○ 赤羽陽子

日溜りをわがもの顔に雀の子
甲高き声の飛び交ふ鳥の恋
鳥雲に入りて風音残るのみ
終電のホームに灯る朧かな
靴音の路地に消ゆるや朧月

○ 篠原幸子

肩書などなくてまばゆし犬ふぐり
子をあやす声のとけゆく春の空
啓蟄やひよつこり届く血圧計
よなぐもり複写機きげん悪きかな
閉店の味の行方や目刺食む

○ 藤原若菜

山菜莢のそよぎ光をひろげけり
広重の遠近画法春深む
銅の手水春光流しけり
はなむけは印旛の水よ鳥帰る
島守に後継ぎのなし春の鳶

○ 大文字孝一

ふるさとに待つ人のあり鳥雲に
親戚の似た顔合はず彼岸かな
梵鐘の余音尾をひく朧かな
春眠や幾たびも見る同じ夢
鳴り止まぬ電話ほつとく春の昼

○ 和田絢子

白梅や手垢のつかぬ日を溜むる
土筆摘む東京育ちは過去のこと
寺参道「酒中花」の名ゆえ椿購ふ
子等駆ける叫ぶ転がる犬ふぐり
親鳥よく啼く日なり大石忌

○ 神田恵琳

吉日の微風を掴み雁帰る
椿咲く八重の一朵を先がけに
春濤の青き未来を信じをり
柳絮とぶ恋文めける仮名の文字
春陰や三尺四方の躍り口

○ 小山 繁子

風光る園児の列の伸び縮み(生田緑地五句)

水車小屋のぞく親子や花菜風

春光を溜めてはこぼす筈かな

すかんぼや噛めば昔の日の句

磴の先また磴ありて花万葉

○ 小島 昭夫

城山に果てし隼人や白椿(司馬遼太郎「飛ぶ如く諺」)

表札は夫婦別姓花ミモザ

みづうみへ比叡より風光り初む

合掌の屋根の繕ひ木の芽風

荷風忌や市兵衛町の名も消ゆる

○ 渡辺 若菜

あたたかや一気に伸びる象の鼻

宇宙の音捕らへて蛇は穴を出づ

とつておきの青空賜ふお中日

春風や独り余生の設計図

アネモネや化粧ポーチに紅二本

○ 西岡 啓子

根上りの松の年月涅槃西風

三月の空にまぎるる鷗かな

啓蟄や太鼓のひびく宮参り

春塵や「延命の水」出ぬ井戸に

永き日の魅夷の「道」にまみえけり

○ 中村 紀美子

守人の仰ぐ夕ぞら鳥帰る(印旛白鳥の里)

扁額の美しき仮名文字彼岸寺

紅椿面そまるほど見上げぬし

隣家の古き土蔵や春落葉(野田二句)

式台の一枚板や花一枝

○ 浅木 ノエ

佐保姫の黄色き裳裾ひきにけり

鳥となる白き風船震災日

亀鳴くやすくすく育つ西之島

珈琲の香りたちくる朝寝かな

春炬燵よきことのみの間こえけり

当月集

安立 公彦選



○ 持田 信子

のどけしや大型タンカー往く浦賀
春疾風鋸山をけづらせて
梅ふむ古刹に天平仏拝す
合掌の地蔵三体木五倍子咲く
境内の護摩の勢や春の雷

○ 佐藤 玲子

年忌とて書かねば忘れ鳥曇
瓦斯止めて乾かす小鍋春の暮
春愁や形見に受くるトルコ石
春愁や茜に染まる海の色
沈丁をぬけ来し風の香りけり

○ 荒井ハルエ

弁財天の小さき祠や囀れり
青饅や女将真砂女の割烹着
順番に抱かれる稚や雛祭
啓蛰やゆつくり解す脹脛
切株の年輪著き春の雨

○ 中 澤 弘

わが里へやうやう届く春一番
野良猫の二つの影や春の闇
傘なしで行けるポストや春時雨
廃刊と届く封書や弥生尽
開花宣言花のお江戸を真つ先に
春日遅々蛇行隅田の河岸を訪ふ
転倒の痛みの今も彼岸西風
草餅や川面横切る渡しの音
穂の芽のひとつを残す自制かな
ものの芽の漲る尊影坪畑

春燈の句

安立 公彦選

啓蟄や地下鉄駅の出入口

東京 池田 節

明け方の湖心棹さす帰雁かな

朝戸出の心弾みや初雲雀

げんげ田の花に囲まれ足湯かな

参勤のありし古道の初音かな

春場所や綱に籠めたる大和魂

朴訥の力士微笑む浪花場所

園児らの指呼の一点初ざくら

路地ごとの海抜標示雪柳

神奈川 新海 英二

拙さも親しさもまた初音かな

ふらここや煙突高くありし丘

公園に鼓笛隊来て春無尽

花咲けば父母なつかしき民家園

妣の字のまだ黒々と種袋

誰彼にかへす会釈や彼岸寺

千葉 木村みどり

さまざまな思ひ育てて桜咲く

三極の花の影おく六地藏

行く春やメタセコイアに背正す

大水車遅日の水を落としいけり

広重の江戸の詩情や日の永し

初蝶の案内こよなき女坂

亡き夫と共にありたるこの桜

音吞みて春天ひと日豊かなり

神ぞ知る千の誓ひや隴月

うどん屋の窓や夕づく種袋

紅白の梅に目覚むる伊吹畑

想ひ出の堤や子らと土筆摘む

種蒔くを老いて多忙の妻とかな

公園の裸木名札下げてをり

春寒しすり寄つてくる柵の山羊

千葉 平沢 恵子

東京 吉田とよ子

京都 安達 正行

島根 土江 比露



余言

安立公彦

身のうちの昔が点る雛の夜

鷹崎由未子

三月本部句会でこの句を見て、先般訪れた野田の豪商、茂木佐邸の古雛を思い出した。雅な享保雛だった。

この句、「身のうちの昔が点る」が素晴らしい。本部句会報にも書いたが、雛を美的に表現することは容易い。そういう句は良く見る。この句はそうでなく、「身のうちの昔」と、心奥に焦点を当てているのが佳い。更に、「昔が点る」と、自らの回想に及んでいる表現が、句を見るそれぞれの人に、それぞれの思いを呼ぶ。余情の深い句だ。

モノクロの夢より覚むる四句節

卯木 堯子

「夢」は普通には「モノクロ」である。モノクロでありながら、夢の中ではそれを咎める思いは全く無い。無いというより、そういう思考に及ぶ余裕を取り得ないのが夢である。夢を願望と取る説もあるが、それも一理ある。自らのことだが、老来、夢は殆ど見なくなった。

この句、「モノクロの夢より覚むる」が、素直に受け入れられる。「四句節」は、キリスト復活前の齋戒期。モノクロの夢、との取合せがみごとだ。

清貧の二字遠き世や利休の忌

白杵 游児

「清貧」という言葉は、一時期の私小説の世界を思い出させる。貧しい暮らしの中の作家の日常が、読む人を強く惹き付ける、そういう私小説は多くの読者を得た。

この句、「清貧の二字遠き世や」は、全くその通りだ。生活史という言葉がある。私たちの生活は、全体として一つの枠の中に納まっていると仮定すると、「清貧」が失われてくるにつれ、貧しくとも心美しく生活して来たものがこの世から失せてゆく。それに代はるものが現代の世界である、と言う。千利休は侘茶の祖。簡素静寂の境地の句だ。白杵さんは今春「日本連句協会」の会長を勇退された。永年に亘る連句復興への協賛は大きい。ご苦労様でした。

春禽や木の間隠れに和合仏

林 紀夫

初蝶に出合ふきさはし上りけり

高埜 良子

今年の神奈川大会は、川崎の生田緑地及びその周辺が主な吟行地だった。生田緑地は今回で二回目であるが、何と

言ってもその中心にある「民家園」の素晴らしさは何時見ても見飽きることはない。パンフレットには、「過去と未来を結ぶ日本民家園」とある。東北から九州という、日本列島の各所の民家二十数棟を、一山の各所に移築した広大な民家園だ。正門を入ると、宿場、信越の村、関東の村、神奈川の村、東北の村と続き、西門の入口には、伝統工芸館がある。それぞれを結ぶ径は、山里を思わせるような斜道もあり、実際に動いていた小型の水車もあった。

掲出の両句はその民家園の一景。当日は鶯も鳴いていた庭前で聞くのと異なり、山里とも言うべき藪で鳴く鶯の声は良かった。里路を思い出させる狭い路傍に立つ「和合仏」には、時を越えて、ほのぼのとした和みごろがあった。まさに「木の間隠れ」の背景である。

後句、この地で今年初めての紋白蝶を見た。民家園の料面は場所により階段状の箇所もある。まさに「きざはし」だ。お二人とも今回の吟行の幹事である。その多忙な時間を割いて案内して貰った。

師家の灯のおぼろや湯島女坂

中野さき江

冒頭の句と共に、この句も三月本部句会の作品である。この「師家」は久保田万太郎の旧家。年譜によると万太郎がそれ迄住んでいた鎌倉を引き払い、湯島に転居したのは

昭和三〇年六月、六十六歳の時だった。しかし二年後万太郎はその地を去り、赤坂伝馬町、更に三年後に赤坂福吉町に転居、三八年急逝する。結局夫人との湯島での生活は二年弱となる。その後は三隅一子と生活する。万太郎先生の履歴と文学との間には大きな乖離がある。

この句、今は万太郎先生旧居跡となった。湯島天神女坂の中途にあるその家を仰ぎ、折から臚の中に点る春の灯火に感じての作品。「師家の灯のおぼろや」に、万太郎先生への憧憬の思いが良く感じられる句である。

取りすぎし齢や蹠跟めく春愁

陳 妹蓉

「取りすぎし齢」とあるが、投句用紙の年齢欄が空白のため不明だ。お仲間の年齢から推測すると八〇歳近くではなからうか。この句、表現から見ると、蹠跟めくのは論外という意志が窺える。条理の通った思いだ。世に言う頑固さではない。更に季語の「春愁」が効果的だ。上五中七の日常の言葉が「春愁」により整った一句となっている。

先日の新聞に、五〇年後の日本の推定人口は、八千八百八万人とあった。男性の平均寿命は四・二歳伸びて八四・九歳、女性は四・三歳延びて九一・三歳。五〇年は長い。然し考えてみると今から五〇年前は昭和四二年だ。本題に戻るが、「寿命」は永遠のテーマだ。俳人にとっても。